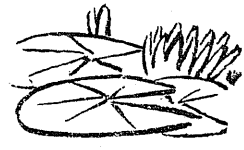
六月の幼兒童謠

葛原しげる

六月といひましても、昔は五月、よく雨の降りつゞける頃です。幼兒も、ガラス障子の中から外の雨を見ては、早く晴れよとも祈れば、雨だれの手品師が、いろ〳〵の音を立てたり、外の物みなを濡らして光らせたりするのを不思議がつて見る時です。

「雨だれ太鼓」とは、勿論、雨の音です。どこかで、何かの上に落ちてゐる雨だれの音を、そのまゝに、歌にしたのですが、きいてをると、ほんとに、ひつきりなしの、トンタンタン、トンタンタンです。全く、一生懸命のトンタンタンです。きつと、雨だれ小人の踊る足拍子の音ででもありませうか。よくも〳〵、疲れずに踊りつゞけることですね、といつた氣持です。



——雨だれ太鼓——

葛原しげる歌
黒澤隆朝氏曲

トンタンタン　トンタンタン
雨だれ太鼓が　トンタンタン
一生懸命　トンタンタン
トタンのおやねで　トンタンタン
トンタンタン　トンタンタン
雨だれ太鼓が　トンタンタン
誰かゞどこかで　トンタンタン
踊つてゐるのか　トンタンタン

（童、唱、名全曲集、一）

これに似たものにたんたら太鼓があります。これは、は

つきりどうしてか、軒下に、伏せてあつたバケツの底を叩く雨だれを見つけたのです。この音は、「タンタラタン、タンタラタン」と、仲々善い音なのですが、よく見ると、このバケツは、古ぼけバケツであります。更に、よく見ますと、この底には、いくつも穴があいてゐるのです。そんな粗末な、廢物のバケツでも、雨だれが叩くとき、かうも朗らかな、きれいな、面白い音が出るのです。凡そ、世の中に、眞の廢物はないものです。どこかに、何かの役にたつ部分があるのです。極端に申しますと、人間の淺智慧では分りさうもない役柄が、積極的にか、消極的にか何にでも振り當てゝ有るのです。それを發見し得ないから、廢物だといつて、すてゝしまふかも知れないのです。よく研究もし、よく觀察もしさへすれば、少くとも、詩の材料は、ころんでゐるのです。幼兒こそは、その發見者です。又、この一篇に流れてゐるユーモアも、幼兒にとつても、悅ばれるところです。

―― たんたら太鼓 ――

葛原しげる歌
弘田龍太郎氏曲

とたんのやねから　ポテ〳〵おちては
太鼓を叩くよ　雨だれ　雨だれ
雨だれ　おちては
たんたらたん
たんたら　たんたら　たんたらたん
たんたら太鼓を　たんたらたん
太鼓は　バケツよ　古ぼけバケツよ
底には　いくつも　あいてる大孔
雨だれ　落ちては
たんたらたん
たんたら　たんたら　たんたらたん
たんたら太鼓を　たんたらたん

（幼年童謠集、三）

作者は別ですが、雨滴の音を、同じ擬聲で現はしたのがあります。雨だれ小人の國は、御祭禮で、太鼓を叩いてゐるのだ、といふのです。まことに、めでたいことです。雨の日は、人間には、太鼓を叩く事が許されない雨の中で、雨だれ小人は、その上に踊つてさへをるのです。そして蝸牛が、祭見物に來たさういふのです。羨ましい雨の小人の世界ではありませんか。

―― 雨だれ小人 ――

富原薫氏歌
黑澤隆朝氏曲

タンタラタン　タンタラタン
タンタラ　タンタラ　タンタラタン
太鼓たたくよ　雨だれ小人
小人のお國は　お祭だ

タンタラタン　タンタラタン
タンタラ　タンタラ　タンタラタン
をごり　をごるよ　雨だれ小人
小人のお國は　お祝だ
タンタラタン　タンタラタン
タンタラ　タンタラ　タンタラタン
祭見に來た　まいまいつぶろ
角の先つぼ　夕やけだ

（童、唱、名曲全集、一）

同じ雨だれの音でも、その落ちて當る物によつて音が違ふのは今更でもありませんが、太鼓と聞かないで、木琴にたとへたのが次のです。これは、又、その音を「歌ふ」ともいつてあります。木琴が歌ふのか、雨だれが歌ふのか、どちらにしても、面白いですね――オヤ、この「歌ふ」といふのは、木琴でなく、雨だれでなく、「手洗ひ」ですね。さうですか。さうですね。しかも其の音の面白さ――ボンカンボンコロカラコロボン。あはゝゝゝ。おほほほゝゝゝ。

――雨の降る日――

川路柳虹氏歌
中山晋平氏曲

雨のふる日に　ひとりでたたく
たたく木琴　ボンカンボンコロ
カラコロ　ボン
雨のふる日に　ひとりで歌ふ
歌ふ手洗ひ　ボンカンボンコロ
カラコロボン

（童、唱、名曲全集、一）

次のは、雨そのものゝ音でなく、雨の水たまりの中を、勇敢に歩く擬聲、擬態の面白さで繋いで進めた、幼兒には少し長すぎる五節ものです。五節は、たしかに長すぎますが、しかし、その擬音の「ピッチ〳〵チャップ〳〵ラン〳〵〳〵」の反復で、つながれて飽くことなく歌へます。その他に、この内容は、友人への親切の敍事があつて、うれしく歌へるのでもあります。

――雨降り――

北原白秋氏歌
中山晋平氏曲

雨雨降れ降れ　母樣が
蛇の目で　お迎ひ　嬉しいな
ピッチ〳〵チャップ〳〵
（反唱）　ランランラン
かけましよ　鞄を　母樣の
あとから　ゆこゆこ　鐘がなる
（反唱）
あら〳〵　あの子は　づぶぬれだ
柳の根かたで　ないてゐる

（反唱）
母様　僕のを　かしましよか
君君　この傘　さしたまへ
（反唱）
僕なら　いゝんだ　母様の
大きな　蛇の目に　はいつてく
（反唱）

（童、唱、名曲全集、一）

此の六月は、地方によつては、螢のシーズンです。そして、螢こそは、「熱のない光」を發する事の他に、幼兒のみならず、大人にとつても不思議な存在です。美しくもあるものです。それで、大昔から、いろ〳〵の童謠が殘つてをります。そして、全國的に共通點のあることも愉快です。

――螢　來　い――

千葉縣
野田町地方

螢來い　山から來い
行燈の光を
ちよいと見て來い
この「山から來い」を「山みて來い」
といふのは盛岡地方です。

――螢　時――

栃木縣
足利地方

ホ　ホ　螢來い
夜は提灯　たけのぼり
晝は　草葉の露すつて
ホ　ホ　螢來い

盛岡地方

○

ホ　ホ　螢來い
そつちの水あ　苦いぞ
こつちの水あ　甘いぞ

この、盛岡地方のに、少し加へたのが、私の鄕里、備後の中部の山村のです。

螢來い　螢來い
あつちの水は　にがいぞ
こつちの水は　あまいぞ
あまい方へ　來い〳〵〳〵

です。同じ廣島縣でも、更に西部のには、

廣島縣安佐郡古市地方

○

ホーホー　螢來い
あつちの水は　にがいぞ
こつちの水は　あまいぞ
ホーホー　螢來い
乳呑ます
ぶんぶん來い塵やらう

といふのがありますが、この「ぶんぶん來い」も、螢らしく

なく、塵やらうは、ひどいですね。

次の「螢來いや、螢來い」は、親しくてよいですね。

○　富山市附近

ホ　ホ　螢來いや　螢來い
あつちの水あ　にがいぞ
こつちの水あ　あまいぞ
ホ　ホ　螢來いや　螢來い

以上は、舊來の童謠ですが、近代のものゝ中に、

――ほ　た　る――　八波則光氏歌　平岡均之氏曲

ほたる來い〳〵　こい〳〵こい〳〵
提灯さげて　やつてこい
螢の提灯　火が青い
消えたり　ついたり　ちら〳〵
ほたる來い〳〵　こい〳〵こい〳〵
こつちの露は　おいしいぞ
螢の提灯　消えかゝる
團扇で　あふげば　ふうはふは

（童、唱、名曲全集、一）

右の第二節は、道具立が利きすぎてをりますが、螢の提灯は、たしかに、「消えたりついたり」である上に團扇であふげば、ふうわふわと、たよりない事です。また不思議なことです。又、「うまいぞ」といふべきを、特に上品においしいぞといつたのも少しく、氣ごりすぎて、うま味がないやうに感ぜられます。

次のは、「螢々來い」の反覆を第三節ではあちこち呼聲にしてあります。前二節のは、共に、自らの呼聲です。その使ひ分けは、幼兒には、はつきり分らなくもありませんが、巧みに、使ひこなしてあります。唯、螢狩の歌としては、「あまいぞ」に對して「にがいぞ」といふのが多いところを「からいぞ」としたのは、苦心のある所でせうか。

――螢――　松岸寛一氏歌　永井幸次氏曲

あちらにも　螢とぶ
こちらにも　螢とぶ
螢々來い　螢々來い
こつちの水は　あまいぞ
そつちの水は　からいぞ
螢々來い　螢々來い
ほたる呼ぶこゑがする
あちらにも　こちらにも
螢々來い　螢々來い

（童、唱、名曲全集、一）

更に、工夫されてゐるのは、次のです。「こつちの水はあ

まいぞ」といひ「こつちのきしはくらいぞ」といつて、その方へ、來い〳〵〳〵、といふのです。「にがい水の方へは行くな」、「くらいきしの方へは行くな」ともいつた後です、極めて、分りやすい幼兒の理窟です。いえ、螢への親切です。

――螢がり――

山本壽氏
歌並曲

ほ　ほ　ほたるこい
こい〳〵　こつちへこい
あつちの水は　にがいぞ
こつちの水は　あまいぞ
ほ　ほ　ほたるこい
こい〳〵　水をやろ
ほ　ほ　ほたるこい
こい〳〵　こつちへこい
あつちのごては　あかるいぞ
こつちのきしは　くらいぞ
ほ　ほ　ほたるこい
こい〳〵　水をやろ

（童、唱、名曲全集、一）

○

この季節の動物の多い中に、幼兒に珍らしくて面白いものに、蝸牛があります。それは、伸びたり縮んだりする角のある事が、最も珍らしく面白いのです。その他には、貝の家を脊負つて匐つて行くこと、その歩みの、極めて遲いこと、が、特徴です。さうした特徴を、すぐ、はやく、見つけるのが、幼兒の特徴でもありますね。

――かたつむり――

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

お庭の隅のかたつむり
眠つてゐるかと思つたら
貝の家から　ぬけ出して
ひとりで　靜かに　はひ出した
お家を　せをつて　はひ出した
どこへ　行くのか　かたつむり
頭の先には　知らぬ間に
二本の長い角が出る
角の先には　目があつて
見まはしながら　はつて行く
角は　のびたり　ちぢんだり
目は　かくれたり　出て來たり

（大正幼年唱歌、第五集）

「かたつむり」は、また「まい〳〵つぶろ」ともいひ、「でんでん蟲」ともいひます。その名の面白さも有りますが、いつも地面から遠くは離れないで、のろり〳〵と匐ひ廻つてゐ

るのですから、愛嬌です。殊に、それが、電信柱を考へ合はさせられ、山のてつぺんを思ひ浮べさせるのですから愉快です。

――かたつむり――

相馬御風氏歌
弘田龍太郎氏曲

でんでん蟲　のぼれ
電信柱　高いぞ
世界中　見えるぞ
でんでん蟲　のぼるな
いばらの木には　刺があるぞ
松の葉は　いたいぞ
でんでん蟲　おちるな
蕗のはつぱは　すべるぞ
敷石は　かたいぞ
でんでん蟲　のぼれ
山のてつぺん　高いぞ
赤い雲　ひくいぞ

（童、唱、名曲全集、一）

これは又、柳の枝、こいつても、葉につかまつて、風のまに〳〵搖られてゐるのです。それが目についたのです。それはブランコをしてゐるのだこ見ました。幼兒は、對照物の何でもを、自分こ同じ生活をし、同じ生命のある同じ世界のものこ信じてゐるのです。何でも、彼でもこ、自分この間に、寸分の隙を感じないのです。その呼吸が分らなくては幼兒の世界の行事も考へられません。何事にも手が出せません。

――小さな蝸牛――

アメリカ名曲

見えろ〳〵　蝸牛が見える
ごこに〳〵　蝸牛が見える
あれ〳〵　見える柳の枝に見える
ブランコ〳〵　蝸牛がブランコ
ゆれても〳〵　蝸牛は落ちぬ
おもしろ〳〵　蝸牛のブランコ

（大正幼年唱歌、第十一集）

○

この頃から、いよ〳〵活動の盛んになる動物に、蟻があります。蟻なんか、幼兒童謠になつてゐないこのみ考へてゐましたこころ、大昔、でもありませんが、次のがありました。今から五十年も昔の「小學唱歌」の第一卷にありました。勿論、その頃の事ですから、文語ですが……、また、修身めく歌ひ振ですが……。

――あ　り――

ありをみよ　やよ　こごも
こものためには　いのちをも

をしまで　はたらく
けなげなさ
ありをみよ　やよ　こども

といふのです。これは日本音樂教育界の恩人といはれてゐる伊澤修二先生の作歌作曲にかゝるもので明治二十五年三月の上梓に成つてをります。しかし、これが今の世に、すぐ役立つのではありませんが先人はやく、こんな方面からも取材してゐたことは、愉快です。

〔この「けなげなさ」は、何でせう〕

私のは、修身の句はなくして、唯、如實にと心がけましたが、しかし、「毎朝早く」から「毎晩おそく」まで、といふ勤勉振と前から引き、後から押し、又、力を合せて働く協同心をも歌ひました。しかし、此の歌曲の面白味は、さうした内容よりも、「チョロ〳〵」といひ、「ゾロ〳〵」といふ擬態、及び、その曲の特殊である所にあります。

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

――　蟻　――

チョロ〳〵〳〵　チョロ〳〵〳〵
大蟻　小蟻
チョロ〳〵〳〵　チョロ〳〵〳〵
ゾロ〳〵ゾロリ
毎朝早く　毎晩おそく
チョロ〳〵〳〵　チョロ〳〵〳〵
ゾロ〳〵ゾロリ
えんやらや〳〵
前から　ひけば
えんやらや〳〵
後から　押すよ
力を合せ　分捕物を
えんやらや〳〵
どこまで　ひくか

（大正幼年唱歌、十）

○

この季節に限つたものではなくても、此の頃、いよ〳〵活躍するものに、蜜蜂があります。これにも、大昔に近い明治十六年上梓されてゐる「幼稚園唱歌」に、一篇出てをりますが、極めて、道歌めいた内容になつてをります。そして、「戯れず」を「たはれず」といひ、「汝」を「な」といふなど、雅語もかなり、在つて、これが何うして「幼稚園唱歌」なのかと驚かされます。

――　蜜　蜂　――

はちよ　みつばちよ
花には　たはれず
そが　つゆ　もちきて

かもせ　ながみつを
こよや　みつばちよ
春秋　たえせず
蜜をば　つくりて
もてこ　わがもとに
あはれ　たのもしく
力を合せ
蜜をば　つくれり
みよや　みつばちを

これにも拙作がありますが、例によつて、あまり、總目めいたことは竝べないで、見たまゝに、事實を描寫したにすぎません。そして、これも、ブン〳〵〳〵〳〵の反覆によつて幼兒の興味をつないでをります。嘗ては、此の歌曲は、專門家によつて、四部合唱にされた事があります。まことに、元氣のよい、それでゐて高雅な曲趣になつてをります。

――蜜　蜂――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

ブン〳〵〳〵〳〵　ブン〳〵〳〵
可愛いゝこゑで　蜜蜂とぶよ
花から　花へ
ブン〳〵ブン〳〵〳〵　とびまはる
ブン〳〵〳〵〳〵　ブン〳〵〳〵
翅音をたてて　あちらの花へ
こちらの花へ
ブン〳〵ブン〳〵〳〵　とびまはる

（大正幼年唱歌、第九集）

○

これも此の頃と限定されてゐるのではありませんが、蛙が、お玉じやくしから成長して、蛙らしくなつて來て、愉快な生活を樂しむ頃です。卽ち、地上を飛んでゐる蛙も、地上では滿足出來ないで、池へ歸つて、皆と、遊ぶ、といふのです。極めて、のんびりした、めでたい曲趣です。

――か　へ　る――

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

一つとんでは　兩手をついて
何か考へ　考へながら
蛙　どこまで　かへつて行くか
蛙　かへつて　何して遊ぶ
池へ歸つて　游いで遊ぶ
池は　私の生れたところ
池の友達　游ぎが上手
池へ歸つて　皆と遊ぶ

（大正幼年唱歌、第二集）